

月刊

地域保健

10
2015

●特集

働く人の健康を守る

—すべての人に必要な支援を

●統括に聞く

大森美恵子さん 《日立市 保健福祉部 健康づくり推進課 課長》



8

特集

働く人の健康を守る

～すべての人に必要な支援を～

10 総論 働く人の健康と社会的格差

18 働く人の健康管理と地域・職域連携の課題

24 日本の女性労働者の実態

30 東京における働き盛りの健康づくり

36 職域、地域で働き盛りの健康づくりを推進

～島根県飯南町の取り組み～

42 日雇い労働者の街・大阪市西成区あいりん地域住民への支援

～あいりん地域の健康力アップに向けた取り組み～

1

統括に聞く

大森美恵子さん(日立市 保健福祉部 健康づくり推進課 課長)

48

隔月連載

東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは《第10回》

54

活動報告

がん体験者との協働による乳がん検診を促す取り組み

78

ニュース

97

ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ!

木山紗由美さん(岡山県備北保健所 新見支所)

102

《新連載》健康政策に活かす保健師活動の評価と「見える化」

今なぜ、「見える化」が必要なのか《第1回》

連載

60 理解して生かす保健師用語《第7回》

「自立」

62 ESSAY 国際保健《第7回》

松田正己

64 保健師のための閑話ケア《第58回》

藤本裕明

68 中臣さんの 環境衛生ウォッチング《第43回》

中臣昌広

73 いまどき子育てアドバイス《第217回》

中川信子

統括に聞く

茨城県
日立市

命の大切さを伝える誇りを胸に、旗を振る
「市民の健康を守る」というひとつの目標に向かって、全員で走り続けたい

大森美恵子

さん

●日立市保健福祉部健康づくり推進課課長

日立市役所前にて

文：太田美由紀（ライター） 写真：カミヤス セイ



茨城県の北東部に位置する日立市は、西に連なる阿武隈山脈、東に面する太平洋、山と海の豊かな自然に恵まれた人口約18万人の中核都市だ。総合電機メーカー・日立製作所の創業の地としても知られ、全国有数の工業都市、ものづくりの町として発展してきた。近年は日立グループの再編などによって人口が減少し、高齢化も進む。

日立市保健福祉部の健康づくり推進課にて今年度4月から課長となり、統括的な保健師として活躍する大森美恵子さんにお話を伺った。

学生時代の経験が 保健師としての下支えに

大森さんは福島県富岡町で農業を営む両親の下に生まれ、4人きょうだいの長女として育った。兄と共に妹と弟の面倒を見ながら、春と秋の農繁期には手伝いもするしつかり者。母が地域の保健協力員をしていたこともあり、

保健師の存在は子どものころから身近だった。その母の勧めもあり、看護師、保健師を目指した。

福島第一原子力発電所事故により、現在、故郷である富岡町は避難地域に指定され、両親はいわき市の兄と暮らしているという。

「今は富岡町もつらい状況ですが、子どものころは豊かな環境で暮らすことができました。また、看護学生としては杜の都・仙台で、保健師学生としては福島市で過ごしました。とても恵まれた実習環境だったと思います。仙台では学校での勉強と並行してセツルメントサークルに所属し、郊外の療養施設や在宅に出向いては療養中の子どもたちと話をしたり、高齢者の血圧測定をしたりしたこともあります。今思えば、あれが私の保健師としての原点だったのでしょう」

当時の看護学科の講義の中で、繰り返し聞いた言葉が心に残る。

「君たちは教科書も授業も、お金を払って勉強しているのだから」

当時はピンとこなかったその言葉は、大森さんの中で「しっかりと勉強し、常に高めることを忘れないように」というメッセージに置き換えられた。「今でも、向上心を忘れずに前向きに進んでいこうと思える自分がいるのは、その言葉があつたから」だと思ひ出されるという。

また、保健学科では、寮と学校を自転車で行き来し、実習でも自転車で家庭訪問を行った。自分の足で地域を回り、地域を肌で感じるこの大切さを自然



働く人の健康を守る

すべての人に必要な支援を

地域の保健師にとって、企業で働く人の健康を把握することは難しい。企業で働く人の健康を守るのは産業医や産業保健師の役割だが、近年は雇用形態が多様であることから、すべての従業員に関わることができない。また、50人未満の事業場では選任の義務がなく、事業者たちは日々の業務に忙殺され、従業員の健康にまで意識がまわらないのが実情である。さらに重篤な疾患により退職を余儀なくされた場合には、保健指導の継続が困難になる。こうした中で地域・職域連携を進め、情報を共有しながら支援の手を拡げていくことが求められるが、個人情報保護法の壁や、制度の違いがあることで、連携推進に苦慮している自治体も多いようだ。

今月号では、働く人の健康問題を取り巻く話題と、働き盛りの健康づくりを重点的に行っている自治体の活動を紹介するとともに、日雇い労働者の健康支援を取り上げる。

P10 〔総論〕働く人の健康と社会的格差

◎取材協力：服部 真さん（城北病院）

P18 働く人の健康管理と地域・職域連携の課題

◎荒木田美香子（国際医療福祉大学）

P24 日本の女性労働者の実態

◎取材協力：伊藤みどりさん（働く女性の全国センター）

P30 東京における働き盛りの健康づくり

- 東京都の取り組み
- 地域産業保健センターの取り組み

◎取材協力：東京都福祉保健局、東京産業保健総合支援センター

P36 職域、地域で働き盛りの健康づくりを推進

- 島根県飯南町の取り組み

◎安田香阿里（飯南町役場 保健福祉課）

P42 日雇い労働者の街・大阪市西成区あいりん地域住民への支援

- あいりん地域の健康力アップに向けた取り組み

◎堂本香代子（大阪市西成区保健福祉センター）

働く人の健康と社会的格差

●取材協力●



城北病院
服部 真さん

(はっとり・まこと 副院長 産業医)

バブル崩壊を機に、日本の労働環境は大きく変わった。貧困や社会的格差が生まれ、生活習慣病が増加、そして保健・医療の格差が広がった。健康格差と社会的決定要因に詳しい服部真先生に、働く人が抱える健康問題の本質を問う。

文・編集部

社会的決定要因が健康を左右する

服部先生は、働く人の健康問題を考える上で最も大きな問題は社会的格差であるとおっしゃっていますが、これについてご説明いただけますか。

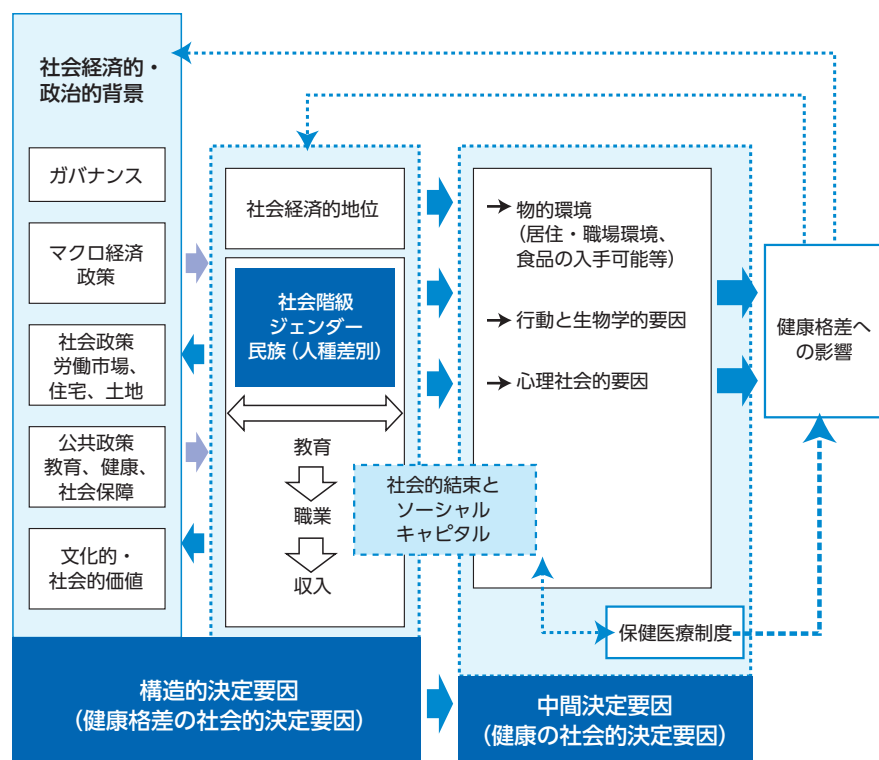
服部 2013（平成25）年に健康日本21（第二次）がスタートしました。第一次では食生活、運動、たばこ、アルコールなど生活習慣の改善にとどまっていた内容になっていきます。それは健康を障害する要因には、まず生活習慣の乱れがあり、そしてその上流に物的環境や社会心理的要因、そしてそのさらに上には「社会経済的地位の格差」があるという考え方です。これは、09（平成21）年の世界保健機関（WHO）の勧告を受けて盛り込まれました。そして健康格差をなくすために、人々の

助け合いによって支援を受けられる機会を増やそうという「ソーシャルキャピタル」が、具体的方策として打ち出されました。つまり、健康を決定付ける要因は、生活習慣病や長時間労働等だけが問題ではなく、その背景にある政治や社会経済的地位などの社会的決定要因が問題だと明確に示したのです（図1）。

社会的決定要因が背景にあると、不健康な生活習慣を生み出します。日本では、お金のない人はやせているイメージがありますが、アメリカではお金のない人のほうが太っています。お金のある人は自然農法で作った値段の高い野菜を食べられますが、お金がない人はカロリーの高いファストフードしか食べられません。

また、低学歴の人はリスクの高い職業に付くことが多いため、職業によっても病気のなりやすさに違いが出てきます。たとえば、専門職や会社の役員

図1 健康の社会的決定要因に関する概念的枠組み



(WHO (2010), A conceptual framework for action on the social determinants of health)
(次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員会 仮訳)



取り組みの目的や意味をじっくり考えて より良い支援をしていきたい

保健師という仕事に誇りを持って

き や ま さ ゆ み
木山紗由美さん

●岡山県備北保健所 新見支所



▲ JR 新見駅近くにある御殿町にて

文＝編集部 写真＝C.Kent

岡山県の西北部にある新見市は、江戸時代の趣を今に伝えるまち並みを残し、市内を流れる高梁川はかつて新見の大動脈といわれ、高瀬舟も往来していたという。

木山紗由美さんは、岡山県の保健師になって3年目を迎える。今年の4月、真庭保健所から、この新見市にある備北保健所新見支所に異動してきた。

高校1年生のころにはすでに保健師になることを決めていたそうだが、そのきっかけは職業適性テスト。「世話好きで、保健・医療・福祉分野の職業に向いている」という結果が出たことから、関連する職業を本で調べたところ、医師、看護師、薬剤師などがある中に保健師を見つけた。

「それまで聞いたことがない職業だったので、興味が湧いて調べてみたら、健康問題を切り口として、ゆりかごから墓場まで、子どもからお年寄り、障害者などいろいろな人の人生に寄り添え



ゴルフ部で身に付けた コミュニケーション力

る仕事だと分かりました。このとき、人の役に立てて自分に向いているのなると、保健師を目指すことにしました」

岡山大学医学部保健学科に入学した木山さんは、ゴルフ好きな祖父と両親の勧めもあり、ゴルフ部に入学した。

「ゲーム中は4人グループで5時間ぐ

らい共に過ごすので、普段話す機会のない部員とも仲良くなれました。他校と交流戦をしたときも、ゴルフを通して初対面の相手のことを知っていくような感覚で、そこに魅力を感じました。どうしたら相手の考えていることを知ることができるかなと考えながら会話したり。先輩、後輩の上下関係も厳しく、移動中は後輩から話を振るとか、先輩を立てるといったことを学びまし